



上川管内公立小中学校事務職員協議会
 発行者 広報担当 島尻（鷹栖小）
 第4号 2019, 11, 1



11月に入り、朝夕はめっきり冷え込むようになりましたが、皆さまいかがお過ごしでしょうか。さて、今回の「きずな」は、9月19日（木）～20日（金）にホテルライフオート札幌にて開催されました第69回北海道公立小中学校事務研究大会の各分散会の感想をご紹介します。

第1分科会報告



当麻町立宇園別小学校 佐々木香苗

第1分科会では2つのレポートが発表されました。空知支部からは学校間連携を意識した領域実践～財政財務グループの取り組みから～、根室支部からは中標津町の予算要求活動における連携と事務職員の役割でした。

レポートが発表された後、予算要望活動で苦労したこと、大変だったことについて意見交流の時間が設けられ、他支部の方と交流を深められました。中でも多かった意見は「予算要望の際にアンケートで集約してもなかなか要望が上がってこない。」ことでした。普段、教職員とコミュニケーションをとる中で、「あれがあったらいいな」などの些細な言葉を聞き逃さず、予算要望に反映していくことが改めて大事だと感じました。また、就学援助制度の入学準備金について論議がなされました。子どもの貧困対策として就学援助制度はとても重要で各市町村でどのように運用しているか、国の基準に沿っているか、など改めて確認しきちんと把握しておくべきと助言をいただきました。その他に給食費未納問題や給食費無料化が進む市町村の交流など多岐にわたり交流を行いました。

【印象に残ったこと】は、末富先生の助言で“子どもの意見表明権”という言葉が使われました。学校現場で子どもの意見表明権が守られているか？子どもアンケートはその一つの手段。というようなお話で、もっと子どもの意見を聞いて尊重することが求められていること、十勝支部助言者の青木さんのお話では、アクションプランの取り組みから勤務時間削減のために給食費の集計作業を学校から切り離していくべき。今後事務職員の必要性が問われた時に行政的な面だけではなく、学校にとって事務職員として必要であるという面をもっと前面にだしていかなくてはならないこと。属人から属職へ、その人だからできることではなく事務職員だからできることに変えて行かなくてはならないこと、でした。



【最後に】第1分科会は学校運営の要でもある財政財務がテーマでしたが、それに伴う学校間連携についてや、地域や保護者との関わりも多く交流され実りある分科会でした。参加させていただき、ありがとうございました。



第2分科会報告



富良野市立樹海中学校 原 友亮

【問題提起】

○宗谷支部：保護者負担の現状分析～離島における保護者負担の現状と分析結果について～

「離島の学校とそれ以外の学校では、保護者負担の違いがないか」「離島の学校だからこそ抱えている課題があるのではないか」を研究テーマにし、調査分析をしたレポートでした。

当該研究では、離島の学校と離島以外の学校との間には保護者負担の差がない。学校ごとに「教材費」

の徴収額にひらきが見られるという普遍的な課題があるとまとめられていました。印象に残ったことは、発表の仕方でした。キャラクターを作り、発表者はそのキャラクターになりきり発表してくスタイルは、まさに発表方法のイノベーションでした。職員会議等で保護者負担の現状についてどのような資料を作ることがより伝わるかを考えることが多いのですが、これまでの常識を壊して、新しいスタイルに挑戦してみたいと思わせる研究発表でした。

○石狩支部：保護者負担の公費化（軽減）の取り組みの継続と課題～江別市における組織的実践～

江別市の学校間連携の取り組みの報告でした。印象に残った取り組みは、【江別市として、各学校でこれまで公費化して教材の一覧を作成して掲示する事により、教材費の公費化に向けて教職員間での共通理解を図り、今後の展開を進めていきやすくする目的で、「保護者負担の減額（教材費）の取り組みについて」を年度末反省、新年度計画や新年度教材選定に係わる会議等に提案していくことを確認、実施した。】という取り組みです。まさに、事務職員連携から学校間連携という広げていく実践だと思いました。

【討議の柱】

1. 保護者負担の現状についての交流
2. 保護者負担軽減・公費化（就学援助を含む）に向けて

印象に残ったことは、【学力向上を目的とした「テスト代金の公費化」の取り組みはどうか】【教材は単純に安いものがあるのか。10円、100円高くても、その子にあった教材があるかもしれない。】というフロアからの発言です。本大会の講演講師の末富さんから「教育改革のゴールは、ウェルビーイングである」というお話がありました。私たち事務職員がすすめる保護者負担の軽減・公費化に向けた取り組みが、本当に子どもの幸せにつながっているのか。ゴールを常に意識して取り組む必要があると思いました。

【感想】

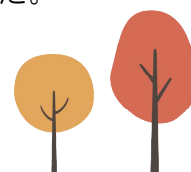
サッカー選手、本田圭佑さんが「貯金は悪」とツイートして、少し炎上しているとネットニュースで見ました。本田さんは、貯金ではなく株式投資をしているということですが、「何かあったときに貯金がないと生きていけない。」「貯金がないと老後の生活はどうなるんだ」という意見に対して私も共感します。ただ、スタートアップ企業を応援したいという思いから株式投資をする本田さんの強い思いも応援したいです。お金の価値観はもっと多様でいいような気がします。これまでと違ったお金の使い方をすることで、社会に新しい価値を生み出すかもしれませんし、また、困ったときに頼れるのは「貯金」という社会はさみしい気がします。

江別市の学校間連携会議は、学校のお金を「ひろげる」取り組みをされていました。自分の学校だけがよくなればいいのではなく、市全体の教育環境を考えたいという思いの強さを感じました。また、講演講師の末富さんからは教育のゴールや授業・カリキュラムに対する価値観を「ひろげる」という提言がありました。

公立小中学校ではどんな「お金」の使い方をすることが、北海道を、日本社会を幸せにできるのだろうか。そのためにはお金の価値観もひろげていかないと…。そんなことを札幌から富良野に帰るバスの中で考えていました。全道事務研は、停止状態の思考のスイッチを押してくれますね。価値観を「ひろげる」研究大会ですね。大会実行委員会の皆様、大変お疲れ様でした。ありがとうございました。



助言者 三村 勉さん



第3分科会報告



名寄市立名寄東中学校 法島 賢哉

今回、第3分科会「学校づくりと学校事務」に参加させて頂きました。第3分科会に参加した理由は、生活の場としての学校づくりを、他管内ではどのように行っているか、どのように連携しているかを知りたいと思い、参加しました。

1日目は、帯広市の学校から「経験年数の違いを越えて、新しい仲間と探る、学校間連携～個別実践の共有と深化～」というタイトルでレポートが発表されました。はじめに、十勝支部の北ブロックはメンバーの約半数が初任校として採用された方々ということで、今後の世代交代も含め、研修体制を見直したとの事でした。今までは、実務研修をメインに教える、教えられる側になっていた研修を、「実践交流シート」を活用する事で、交流の活発化を図ったとの事でした。この「実践交流シート」はあくまでも交流するための方策であって、実践発表をすることが目的ではないということで、個人の実践（学校づくり）を交流し、そして経験年数に関わらず共有化していくための手立てとなっているとの事でした。共有化されたそれぞれの実践は、各校で還元していくために、PDCA サイクルの形式の提案を再度行い、各事務職員の工夫や、変化・進化をしていく事例も多いとの事です。討議の柱については、経験年数の浅い事務職員の現状や、ベテランの事務職員の方が学校づくりについて何を意識しているか、新しく事務職員となった方々と交流する事でベテランの事務職員の方も新たな発見がある事を交流しました。



助言者 高田 敏也さん

2日目は、置戸町の学校から「子どもを視点においた学校づくりをめざして～子どもアンケートの実施に向けて～」というレポートが発表されました。1

日目は学校づくりの交流がテーマでしたが、2日目は、子どもの視点での学校づくり、子どもアンケートの実施方法についての交流になりました。子どもアンケートの実施方法という事で、市町村単位で取り組んでいるところ、生徒会が主体となって取り組んでいるところ、そして石狩管内のある市町村では、教育委員会が子どもアンケートを行っているという報告がありました。一方で、子どものとんでもない意見についての対処、要望が叶った・叶わない子への不公平感を指摘され、実施できない市町村もあるとの事です。子どもの視点での学校づくりについて、子どもアンケートが市町村の予算の編成資料になっている例もあり、子どもの声が市町村の財政計画まで届く実績にもなっているようです。討議の柱では、学校づくりに行きつくまでの課程を探るという事で、子どもアンケートの実践までの過程、実践後からの積み重ねの重要性について交流しました。子どもアンケートの実践の積み重ねがアンケートを実施できない学校への説得材料になる可能性や、教育委員会への説明資料になり得る事も議論されました。

今回、第3分科会に参加し、経験年数に関わらず学校づくりの実践・事例を交流でき、実りのある研修となりました。事務職員が主体となって、子ども達の教育・生活の場を整備していくためには、子どもの視点を意識する必要性があり、それが子どもファーストに繋がるような学校づくりを自身の学校でも実践、そして還元していきたいと感じました。

第4分科会報告



南富良野町立南富良野西小学校 宮嶋 愛理

はじめに

今大会は上川が主管での開催ということで、大会の開催にかかわった皆様大変お疲れ様でした！

第4分科会は、討議の柱に「学校間連携の組織と運営」「事務職員組織と研修」の2本の柱を据え、上川・旭川・留萌・胆振と4つの支部からレポートが発表されました。



- 旭川支部：世代交代期における学校事務研修のあり方の考察

旭事協第2グループの現状と課題を踏まえ、今後の学校事務の研修活動への考察の発表でした。

発表の手法として、まずアイスブレイクに参加者を年代別に起立させ、現場の年齢構成の二極化への危機意識を会場内で共有しました。その後「世代交代」をキーワードに、研修活動に必要な視点は「組織の課題解決力(共有力)」と「人材育成」であるとし、グループ内での協議方法や調査方法の工夫、研修活動の実践報告がおこなわれました。

会場からは世代交代期における現在の各支部の研修活動について、若手が大量採用されたことにより実務的な研修が増えた、つかさどる的な研修が行えていないなどの声もありましたが、反対に経験年数にかかわらず平場で議論できるよう研修方法を工夫しているという支部もありました。

- 上川支部：「東神楽町共同学校連携事務室」の概要～設置の経緯と業務構築、事務室の今後～

東神楽町内で平成30年より導入された「共同学校連携事務室」の設置の経緯から、今後についてのレポート発表でした。発表のなかでは共同学校事務室と共同実施の違いを詳しく説明し、町内の諸課題を解決するための共同学校事務室の有用性が伝えられました。

最後に共同学校事務室の今後について、自主的に業務を構築していくことが可能である点、個別の連携事務である点から、現在各所でおこなわれている学校間連携会議との整合性が高いことを示し、今後、他市町村での一方的な導入も危惧されることから、学校間連携会議が活発な市町村は、現場のイニシアティブで共同学校事務室を推進してほしいと提言がありました。

参加者からは共同学校事務室への質問のほかに、設置要綱に「ウェルビーイングについて」「事務職員の研修について」の新たな記載の提案があり、これに対し坂田氏は前向きに検討する意向を表しました。

- 留萌支部：つかさどる事務職員のための戦略的研修プログラムをめざして「子どものウェルビーイングを目指す事務職員」をテーマに、留萌地方事務職員協議会内で行った研修実践の発表でした。発表者の成川氏は「どのようなスタンスで学校にいるかを考えられる事務職員になって欲しい。」と述べ、事務職員の現場にいる意義と研修活動の重要性を改めて唱えました。



会場では旭川支部と留萌支部の発表にからめ「学校事務職員の職務、研修のあり方」について、教育現場での実践を交えながら活発な意見の交流がおこなわれました。

- 胆振支部：地震の時私たちは～それぞれの思い～

胆振東部地震から1年、さきの地震災害について胆振支部の会員それぞれの思いをまとめた発表でした。助言者である猪股氏（富良野市教育委員会学務係長）は、自身が総務課で防災担当をしていた経験から、有事の際に対応できる防災意識、日頃からの地域とのかかわりの重要性を述べ、公務員としての義務感も大事であるが、自治体自体もまた被災者であることを忘れないようにと語られました。

【感想】

各支部からの発表を聞き、どの支部も「つかさどる事務職員」について、自主的に業務に取り組み、現場に立って教育環境整備をすすめることが事務職員の職務と捉えていると感じました。

しかし教育現場の現状は、行政側が事務職員に対し、教員の業務負担軽減の為の業務移譲や、職務標準表の提案を検討していることから、現場が目指す事務職員像と行政が求める事務職員像にすれ違いが生じていると感じます。札幌市では共同実施が始まり、東神楽町では共同学校事務室が設置されるなど、学校事務職員という職種は大きな変革の時を迎えています。さらに大規模な世代交代という課題がここに加わ



助言者 猪股 俊弘さん

ることによって、これまでの職務への取組の継承が、より難しいものとなっているのではないのでしょうか。

学校事務職員にとって変動の時代、今日まで諸先輩方が積み重ねてくださったものを次世代に繋げていくためにも、若手ベテラン問わず「全員」で研修を行い、共通の課題意識をもつことが、今後、一層重要になっていくと感じました。



第5分科会報告



美深町立美深中学校 米田 章太郎

第5分科会は「近年採用者のための日常実践交流」ということで、採用1～3年目の経験の浅い事務職員が一堂に会する機会となりました。このような機会を設けてくださった大会実行委員の方々にお礼申し上げます。開催は2日目のみでしたが、採用一年目の私にとって大変有意義な時間となりました。分科会は主に、渡島支部の「校内予算編成時の提案及び決算報告の仕方について」、函館市支部の「学校事務だよりの交流と、学校間共通事務だよりの作成について」の2つのテーマに沿って討議されました。



【校内予算編成時の提案及び決算報告】

「予算提案」、「仮決算報告」、「決算報告」について、それぞれ3校ずつの資料の例示があり、それぞれに工夫が施されていましたが、共通する部分として、「わかりやすく」、「見やすい」資料作りをされていて、大変参考になりました。具体的にはカラーで作成、備考欄に詳しい品目の説明、吹き出しを利用した詳細なコメント、執行率、前年との比較など、様々な工夫がありました。他校の資料を見て学びを深めること、職員への説明のためにコミュニケーションを図ることが必要だということを経験させていただきました。また、共有フォルダを利用したリアルタイムでの予算執行状況の公開についても少し話題に上がりましたが、上川支部においては、大会に先立って上事協 WEB で東神楽中の坂田さんが公開してくださった周知方法を活用することで、より透明性の高い予算執行周知ができることが改めてわかりました。私も上記公開方法を真似しているところですが、今回学んだことを踏まえ、自分なりに工夫していこうと考えました。

【学校事務だより】

函館市支部の発表では主に「学校間共通事務だよりの作成について」が中心となりました。給与関係、年末調整関係、職員転出入など各学校で共通する内容が例示されました。資料自体が大変参考になるものばかりでしたが、実際に私の勤務している町で学校間共通の事務だよりを作成するには、町内、または各ブロック内での学校間連携がより必要になってくると感じました。第4分科会での話題の中心であった、共同学校連携事務室があるならば、このような形態の学校間共通事務だよりを発行するのが比較的容易になると考えますが、現在の美深町では学校間連携会議が年に数回行われるだけなのが現状です。学校間の連携をどう発展していくかが今後の課題です。

また採用年数が浅いにもかかわらず、事務だよりを定期的に作成している方が多かった（7割程度）ことに驚きました。作成している方曰く、事務だより発行後の反応が気になるとのことでした。せっかく時間をかけて作った事務だよりなので、なるべく皆さんに見ていただきたいところですよ。助言者の方からは事務だよりの中に「人間味」を加えると、反応が返ってきやすく、作成のモチベーション向上にもつながるとの助言がありました。そのほか、「職員向け」の事務だよりと比べて、「児童生徒保護者向け」の事務だよりではハードルが高くなるので、まずは職員向けからチャレンジしてみるとよいとのことでした。



【まとめ】

分科会の内容はとても参考になりましたが、限られた時間の中で、人数が多かったせいもあり、全員が発言し積極的な意見交換ができなかったのが心残りでした。今後の上川支部やブロック研修会で積極的に意見交流をできるように頑張っていきたいと思えます。

椎名実行委員長

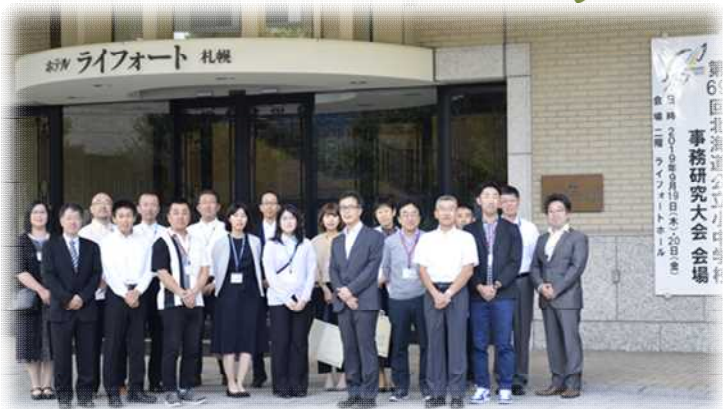


坂本事務局長

今回の全道事務研は、上事協からの67名を含む全道553名の参加者のもと開催されました。

椎名実行委員長を中心に、坂本事務局長の細やかな運営のもと、上事協会員の皆さまにご協力いただき、会員一丸となって、大会を成功裏に終えることができました。準備から当日の運営まで、誠にありがとうございました。

次回、2020年度の第70回全道事務研は、小樽が主管支部となって、今年度と同じくホテルライフオート札幌にて開催されます。皆さまぜひご参加ください。



ありがとうございました!



懇親会のようす



講演者 末富 芳さん

